

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十年一月廿日印刷納本 昭和二十年二月一日發行

第十一卷 第二號

淨

土

二 月 號

目 次

表紙・卷頭カット……………牧野 醇

ただ戦ふのみ……………（卷頭）

徳本行者……………

吉田絃二郎……………（三）

工場の感激……………

伊藤久子……………（六）

お婆さんの心意氣……………

小坂信教……………（九）

柚の醍醐味……………

齊藤弔花……………（二三）

車中の總親和……………

安井大學……………（五）

佛教音樂について……………

石井文雄……………（七）

信仰相談……………中村辨康……………（二三）

歌 壇……………岩野喜久代選……………（二二）

俳 壇……………太田耳動子選……………（二六）

浄土宗の鍊成思想……………

大野法道……………（二四）

編輯後記……………

（二六）





不惜身命、ただ戦ふのみ

第八十六回帝國議會開院式に賜はれる勅語に「朕カ統後ノ一億臣民ハ勇戦力ヲ生産ニ増強シ以テ今日ニ追ヘリ」との御句を拜し、畏き大御心にただ恐懼感激いかなる苦難があらうとも一層の努力奮闘を誓ひ奉るばかりである。しかし自ら顧みて、この御綸言を拜し得るほど一億の一切をあげて必死の御奉公を捧げ奉つたであらうか。微力非才ながらも出来るだけの努力はしてきた心算であるが、これで十分であつたらうか。戦線の將兵は身命を鴻毛の輕きに比して力戦奮闘をしてゐる。ガ島兵團長が「攻略ならずんば一兵と雖も生還を期すべからず」と訓示し、印緬戦線の航空幕僚が「君は知つてゐるか、われらの戦友があらゆる惡條件のなかで、鬼のやうに怒り、神の如く戦つてゐることを」と叫んだ言葉は、よく皇軍の活躍を示して餘りない。

航空機さへ十分に補給出来たら戦ひは必ず勝ち國を磐石の安きにおき得ることを知りながらも、一兵も生還を期さぬ必死の覺悟で、鬼の如く怒り神の如くに増産に働き續けてきたであらうか。神座談會で丹心飛行隊の梅原少尉が、「新聞で一番いやだったのは白金の退職をとがめるやうな記事、まだそんな人があるかと思つて」と語つたと、新聞が報じてゐた。神鷲をしてかゝる言葉をなさしめて何の統後ぞ。

またある經濟誌の記事に、國內のニッケル資源の獲得が緊急に必要なことが判つてゐても、その事業が引き合はぬため活潑な開發が行はれず、眞に國家存亡の一大戦争を敢行してゐるといふ認識が缺けてゐるとある。現在かゝることがあり得るだらうかと疑はずにゐられぬことがありとすればまさに懸死すべきものである。

われ／＼は幸ひ念佛を申し、宇宙の大光明大生命たる阿彌陀佛に歸命しつゝ暮してゐる。従つて自づと小我を捨て、大我に生きるべく精進してゐる。大義に殉ずるの心を比較的自分のものになし易い修業をもつてゐる。神鷲梅原少尉の言葉「突つ込んでから本當に生きるんだ」との心も判るやうに思ふ。この上はわれ／＼は大君の赤子として不惜身命、ただ戦ふの道あるばかりである。



徳 本 行 者

吉田 絃 一 郎

行誠上人が或る時、永代から船に召して横濱へお出かけになつたことがあつた。たま／＼風が強く、品川沖の臺場附近で船は覆り、上人も海に沈まれ、今はこれまでと思ほして念佛を唱へられたが、不思議に救ひの舟に助けられて、御一命を完うせられた。そのをりの遭難を記された序に「水火盜賊、怨家債主とて、それほどの業果は受くべきものと定まれるなるべし。楞嚴經に順業發現の説あり、俱舎には巡逆の説あり、よく知るべし。然し僧者などは一世の中三五度は今死ぬべしと思ふほどのことに逢ふべし。發心修行の一助行なり。惡事災難はなきやうなど祈るは在家平凡の人情なりとみるべし。鑑真和上の日本航海に十二年を歴て種々の難に値ひたまへる、元祖の七十二にして遠流のことあるなど——いかなる時にいかなる所にあひても、恆常の道心を失はざるを沙門の心操とすべし」と説かれ、更に左の一首を添えてある。

淺瀬得し事をうれしと思ひしは

まだふかゝらぬさとりなりけり

これは山家の人々にとりてのみののおさとしではない。在家の人々にとりての教訓でもあり、殊に今日、日夜敵機の空襲下に在るわたくし共にとりての尊い訓戒である。

「引きよせて結へば柴の庵にて

とくれはもとの野原なりけり」

「我れといひ、彼れといひ、家といひ、家財といひ、所縁によりて假りの相となつて結ばれたものに過ぎない。一とたび夜半の風來たつて、解き放たれんか、屑々たる朽小柴の草の間に散在せんのみ。我れもなし。彼れもなし。本來無一物。峻嶺に對して長嘯すれば只半輪の月の天に懸かるのみ。

いざとなれば根強い頑張り、利く、日本民族の腰骨の強さは、この悟りに在るのであらう。

行誠上人の「徳本行者傳」の中にこんな話を書いてある。高崎侯の藩中に寺田五右衛門といふ劍道の達人があつた。

五右衛門の弟子に白井亭といふ者があり、白井は後には無双の劍道家とうたはれた人であるが、當時はなほ自己の力

に慢心するところがあつた。そこで五右衛門は亭を呵して高僧に参じて道を學ぶことをすゝめた。亭は徳本行者の許に走せて我は劍客なり。劍法の示を請へよと、吾師のいはれしによりて遙々訪奉れり。願くはしらせ給ふ事もましまさば、をしへたまはん事をと言つた。その時行者は微笑を泛かべつ、「我は念佛の行者なり。豈武事にあづからんや。唯しる處は念佛して、極樂に往生するのみなり。汝も後世のために、念佛をせよや」と、鉦を打つて念佛を申さるゝ、その姿をじつと眺めてゐた亭は驚かざるを得なかつた。「つらつら見奉る時、豁然として劍法の妙處を悟れりとぞ。……分毫のすきまなく、一握の撞木をもて千萬の敵にも對すべき」念佛のお姿にはさすがの勇者も膽をつぶし、悟るところがあつたといふのである。その念佛の態度がいかにお立派で堂々たるものであつたかゞうかゞはれる。

念佛は往生極樂への合符である。その一句一聲に依つて直ちに凡夫から菩薩への大飛躍を約束された最大事である。南無の一句、阿彌の一句、陀佛の一聲も渾身の力と魂をこめたものでなければならぬ。

徳本行者の御一生を拜すると、苦行と奇蹟の連續である。人間の耐へ得る限りの苦行の連續である。

「千津川の草庵に移られし後には、緒の上に麻の七條の袈

裟一肩をまとひ、食もわづかに命をささふばかりなり。朝には丑の時より起出て、溪水に臨て廣懺悔を誦ながら垢離せらる。禮拜の數およそ五千七千、或は一萬に滿る事もありけり。かつ禮拜の式、多くは五體投地をぞもちひられける。師の苦行あまりに精勵をこらされたるゆゑにや、音聲かれて言語をなす事能はず、喉のうちいたく損じて、聲を發すれば口いたく齒うごき、耳鼻より手足の指先にいたるまで物身通徹すること、言語にのべがたし。をりしも嚴寒のころにて毎曉の垢離には寒風肌を刺し、滿身のひび、蟬あたかも松皮のごとし。禮拜し給ふごとに鮮血ほとばしる：「もつて御苦行の一般がうかゞはれる。

行者は幾度となく夢に或は現に御佛を拜み、菩薩たちに逢つてをられる。或る時は夜中、行者を訪ねて來た尼を或る社の神が案内してをられる。或る時は三輪明神が白髮の翁となつて、行者の通行さるゝ道を里人に教へて、十念を授けさせてをられる。或る時は更闌けて人靜まつて、獨り念佛してをられるところに、和佐山の高明神が現はれてをらるゝ。こんな奇蹟を拾つて見ると數かぎりもない。他の人の場合であれば疑はしい奇蹟も、行者の場合にはいさゝかの疑念を揮む餘地もない。

凡夫の生活から見れば不可能の奇蹟であるが、行者のやうな高い、超人間的な精進の境にまで進み得た人にとつて

は、それは當然のことである。宗教生活はこの高さまで精進することに依つて始めて、眞の生活に入つたといふことができるであらう。

非常時には非常の信心が生まれる筈である。心を強く、氣を大きく張つて、眞實の念佛を申すこともできる筈である。

車中の總親和

列車が混むので旅に出るのも容易でないが、その中でも時々他人に迷惑をかけてゐるのに知らぬ顔でされたりすると、更のこと氣持が焦らだち勝ちになる。車内の混雑も重要物資の輸送に協力してゐるのだと知れば、これもお國のためであるから不平云はぬはもとよりのこと、お互さまに譲り合つて僅かな間でも氣持よくしたいものである。

例の通り列車は超満員であつた。私の前にも横にも疎開學童へ、許されて面會にゆく親たちが乗つてゐた。何れも久し振りにみる子供の元氣な顔を胸に描いてか、仲々賑やかなものであつた。中でも婦人たちは申し合せたやうに四、五歳位の子供をつれて、兄や姉やの噂さでもちきつてゐた。

その内に前にゐた女の子が、母親の手提げの中のものを持ちきれないやうにしきりとお

ねだりを始めた。若いお母さんは仕方なさうに袋からパンらしき手製菓子を取りだして「あの、失禮ですが如何ですか。」とわが子にやる前に先づ横にゐる男の子にわけてやつた。

「まあ、恐れ入ります」と子供に代つて禮を云ふ隣のお母さん、

「いゝえ手製で、何も入つてゐませんよ、まづいものですが」

と同じやうにわけてやれば、二人の子供は急に仲よしになつてパンを食べ始めた。貰つた方のお母さんはやがてケースから蜜柑をとり出して、

「ほんの一つですけど」

とお返しのつもり、前の女の子にもやつた。二人の子供は又しばらく平和に食べ出した。

「おいちい／＼」を連發すれば、親たちは自分たちも美味しいかのやうに満足してゐた。次に今度はおいもが出た。しかしこれは双方

持つてゐたので交換なしに「おいちい／＼」が繰り返された。

私はこれを見て非常に嬉しかつた。子を持つ親でないとならないことだと思つた。私はいつも子供の前では自分の辨當を置くにも躊躇する。子供ならずとも大人さへ、他人の辨當の中味が氣になる始末で、自づと食欲をそゝられてしまふではないか。前のお母さんはさすが子供の心理を知つて、先づ隣の子供にやつてからわが子に與へたので、さゝやかながら隣組が出来てしまつた。

横のお母さんは

「さあこれでおしまいですよ」

と一つの蜜柑を半分づゝ二人の子供にわけて與へた。一寸した思ひやり、何んでもないやうに働く親切心、これさへあれば明るい生活は案外手近かなものである。私は車中正面にはられた「總親和」のポスターを眺めてほゝえまづにゐられなかつた。

(中央線にて 安井大學)

工場の感激



勤 勞 報 國 隊

伊藤久子

特別攻撃隊によつて次々とあがる戦果を私は生徒と一緒に油に塗れた工員の中にまじつて聞いてゐた。「有難い」「本當によくやつてくれた」と何處かで小さいながら聲がした。鼻の頭まで黒くした旋盤の岸田さんが「畜生！ほんまに」と言ひながら何時ものまけん氣の醜をく

しや、くしや、とさせて拳骨で涙を拭つてゐるのを見た。私はつんと熱い涙が鼻をついて、ほ一つとかすんでしまつた。私は何も言へなかつた。有難うございます。唯それだけ合掌したい様な尊嚴さである。

工場に四十名の生徒をつれて出勤してから七ヶ月黙々として汗を流して働きつゝけた。よく働いた生徒達だつた。サイパン玉碎の日くろがねの旋盤の續いてゐる作業場で「海ゆかば」と「君が代」の合唱をして祈りに近い残業をした日の事が思ひ出される。あの日私は生徒にこんな事を話した。私は本當の意味の戦士にならなければならぬ。我が國は神代より嚴に受繼がれて來た神國であつて、一木一草の末にいたるまで皆大君のものであり、我々の祖先が血と涙の限りない愛情とを持つて守り續けた尊い國である。私の物は一物たりともない。軍人は喜んで敵弾の前に立ち萬歳を叫んで生命を奉還してゐる。あなた達も學業を奉還した。あなたの方の父兄は又同じ年頃の男子は次々にこの大御戰に馳参した。

玉碎の悲しい報導を聞いた。しかし私共は悲しんではならぬ。陛下の軍隊がつかつて下さる武器を造り、サイパン、タラワ、マキン、クエゼリン、あらゆる島を一刻も早くとり返して、玉碎された英靈を弔ふ日を、そしてそれらの英靈を祭るお宮をその地に建てたあかつきには、私共は皆でお参りし、お詫ひしより、兄を彼地でなくした山下さんや大山さんは眞先に拜ませて上るのだ。私の力がたりなかつた、明日からは勝利の日の爲に更に働くのだ。

皆頼をはてらせてゐた。泣いてゐる者もあつた。あれから三月して臺灣沖の戦果を聞いた。私はあらゆる物に感謝したい氣持にみたされてゐた。出勤してから七月考へて見ればいろいろの事があつた。邪魔氣なお客様が入社して來た様な眼でながめた女子工員、古くからの女工根性と言ふ物が抜けきらず、一刻も早く御仕事を覚えたいと願つてゐる生徒を流し眼で見、上の人の居ない時は仕事を教へてくれなかつたり、ゲージを使つての綺麗な仕事は御自分なさつて、キンキラ聲で流行歌を唄ひ、生徒には油で洗つたり、ペーパーで指が曲らなくなるまで擦つたり、醜まで油の飛びつく様な仕事ばかり

り、生徒はそんな仕事は教へてもらはなくても出来るし、隙な時間ゲージを教へてくれと言つても新米のくせに等と小馬鹿にして教へてくれず、劔の修業は飯焚きから始まるのは昔の話、敵が目前まで来てゐるのに、劔の修業は飯焚きからでは始ままい、と一時は揉めた事もあつた。

一耗の幾百分の一の差を見逃しても、戦力に偉大な誤差をあたへる弾丸や部品の検査、一つの小さな弾丸にも何十回もの検査が施される。目視と六感の働かないものは、完全な検査工にはなれない。一つの長さ、小さな螺旋の検査にも眞心が集注される。眞に祈りと眞心の結晶である。

或生徒が言つた。「私の戦地にある父は言ひました。『お前の造つてくれた弾丸を、わしが敵



線に敵に打込んでゐる。さう思ふと前線銃後の距離は超越されて、親子が手を取り合つて戦つてゐる様な気がする」と私は祖國のために砲弾を命死に造つて前線の父に送ります」と私はその子の顔を見て涙ぐまれてしまつた。全くさうである。銃後の私共が心血を注いで造つた弾丸は、眞心は前線の火の様な將兵の奮闘と渾然一體となつて米英の陣地に打ちこまれてゆく、身内の熱くなるを禁じ得ない。

私共の學校は生駒の峰つゞきに、金剛、葛城の山々が眺められる河内野の中に建つてゐた。紺碧の空のもとに、くつきりと目映い明るさを持つて、青田の末にひろがつてゐる山々にこゝろすはれて、六百年の昔、敗れることを知りつゝ、死を覺悟しつゝ、大君の御爲に七生報國を叫びながら往

佛教音樂について

石 井 文 雄

いかなる宗教にあつても、必ず音樂といふものが伴ふ。しかもこの音樂は單に伴つてゐるばかりでなく、その教理を傳へる上に重大な意義を持つてゐる。特に佛教に於ては音樂が重要缺くべからざるものとなつてゐる。

佛教音樂といふのは、一つの獨立した特別なものである。支那では佛教音樂を法樂と呼んでゐた。わが國ではこれを聲明といつてゐる。聲明の外に和聲等があるが、これは和語を以て述べられた七五句連形のもので、支那偈頌(漢讀)を本邦の今様文に譯して誦ひ、特に佛の功德を讚美する唄のことである。従つて和讃は歌謠式のもので特殊の佛教音樂とは考へられないのである。

次に讀經は一つの音樂を持ち、旋律の上に歌はれる一種の音樂である。これに反して甚だ一般的でないものに林邑樂といふものがある。林邑樂とは佛哲の傳へたといふ八曲からなり、天竺樂としての特色を十分に發揮してゐる。而してこれは完全なる音樂形式を備へ、純正なる調律を保つてゐるが、餘りにも古曲であり古舞で

いた大楠公の遺跡を仰ぎつゝ、歴史の美しさ、尊さ、日本人の神の様な大君への忠烈に、こゝろを熱したものである。私達は歴史を守らなければならぬ。この美しい國土を、忠烈を永遠に子孫に傳へるために、身をもつて戦ひぬくのだ。金剛山は雲にも、霧にも、月にも、落日にも、何時も限りなく美しかった。永遠の御教は、こゝろに痛い程感じられる。この學舎に學んだ私共は、七月、一、二年生の殘留生徒に送られて、まるで出征兵士の様に、萬歳に送られつゝ工場に出動した。皆眞鍮だった。右手ばかり使ふので、右手は太く腫れだつて行く、切粉が入つて放つて置くとのひらは疣だらけで疣こりりとやらの漢方薬を塗りたくつて追附かない始末、かわいさうでならない。しかし、これでいゝんだ、これで勝てるのだと私は思つた。油負けで手の皮がぼろ／＼むけるものも出て来たが、これで勝てるのだと言ふ信念は、どんな苦しい事も克服されて行く。

始めの中、學徒を白い眼で見てもた人々もなりをひそめた。數ヶ月たつた今日は學徒も工員も、水と油の寄合所帯の様な事なく、楽しく御仕事出来る様になつた。學徒の中に病人が出来た時、同じ班の女の工員さんが親身になつてい

ろ／＼氣をくばつて下さつて本當に有難かつた。「四國へ歸つたお土産よ、少しやけど、食べて頂戴と柿一個と栗三個下さいました」と、生徒がエプロンにくるんで持つて来た時、私は何とはなしに、こゝろから本當によかつたと言ふ氣がした。

先日吉田絃二郎先生が伊藤に「今の若い人達が一切をさ／＼げて國の爲働いてゐる姿は、本當に神様ですね」とおつしやつた時、こゝろから本當にさうですと申上げた私だった。

今日の新聞も亦比島附近をめぐるの激戦を報じてゐる。敵の戦意は侮り難い。戦ひはこれからだといふ感が今更の様に深くこゝろにしみる。

今朝「私の家の庭に咲きました」と言つて生徒が半白梅を持つて来てくれた。今夜も航空部品の生徒は十一工場の電燈のもとで残業を續けてゐる。油と噪音の工場の外は月が美しい夜だった。

(中村 芳子畫)

篤志寄附者芳名

金五圓 比島派遣隊第一七四八部隊本部

大久保 敬吾殿

金三圓二十錢 福岡縣八女郡永田村

近藤 ハル殿

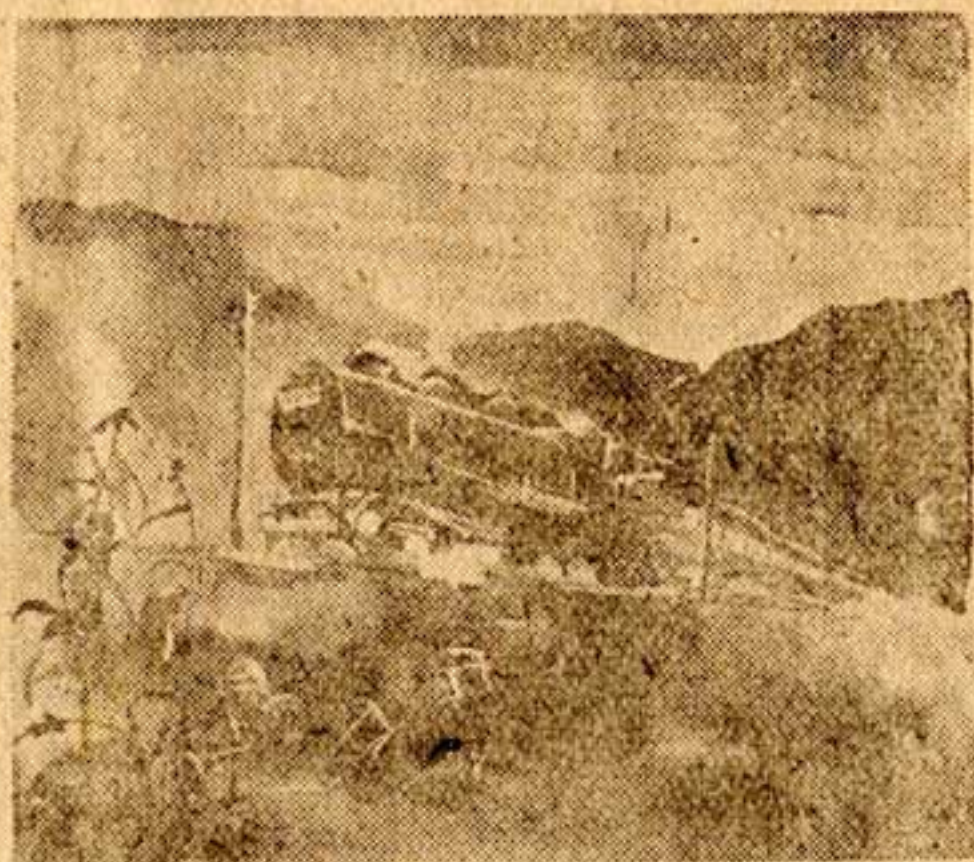
ある。

聲明は因明、内明、醫方明、工巧明、聲明の五明といふものの一つで、聲音語法を正す方法であつた。これが一種の聲樂となり、佛會歌誦として梵字梵讃となつた。わが國には弘法大師によつて傳へられたといふが、當時のものは音樂として殊更に行はれたものでなかつた。

梵讃に伽陀、三禮、勸請如來頌、散華、鉢杖、行道、對錫、揚經問、讀經、教化、念佛、禮讃、和讃等の要目があり、要禮があるが、これらの禮式はいふまでもなく一種の禮である。これは支那儒教の影響であらうが、禮式を重んずる點からして佛教音樂は時代とともに進歩したり、一般民衆に愛用されたりしない性質を持つてゐる。

讀經を以て音樂と解するならば、佛教は殆んど音樂的な存在である。故に佛教から音樂的要素を全く取り去ることは出来ない。

古來音樂が榮へた時代には必ず佛教が隆盛を極めた。特に佛教音樂の隆盛をみた時代に於てさうであつた。古來の佛教音樂はしばらくおき今は佛教的な音樂を唱導したい。百の説教よりも音樂的訓練が重視されてよい。佛教的音樂の出現と、佛教の音樂化に力を致したいと思ふ。殊に淨土教に於て然るべきものと考へる。



お婆さんの心意氣

小坂 信 教

「お母さんも男の赤チャンがいゝと思ふんだけど」

「そんなら男の赤チャンにければいゝじやないの」

「そうね、ほゝゝ」

と、お母さんはお笑ひになりました。

「それで、今度も田舎のお婆チャンが来て下さるの」

とヒロミが質ねますと、お母さんは

「今度は、いつ空襲があるかも知れないし、それに近頃はお婆チャンは神経痛と言ふ御病氣で足が痛いんですつて、ですから来ていたゞけないのです」

とのお話でした。

此の前ヒロミの弟のシンヤが生れた時にはお婆チャンが来て下さつて、赤チャンをお風呂に入れて下さつたり、夜はヒロミと一緒にねて下さつたりしたのだけれど、今度も来て下さるといゝのだがなと、ヒロミは思ひました。

ところが、ある日の事でした。

「デンボー」と言ふ大きな聲がしたので、ヒロミが出てみますと、郵便屋さんが小さくたたんだ紙を下さいました。お母さまに讀んでいたゞくと

「ケフオルハハタツ、コムラ」

と書いてありました。

「今日の夜、お婆チャンが田舎を出て東京へ来られるんですつて」

「わあ、うれしいな、するといつ着くの」

「明日の朝ですね」

「ヒロミ、お迎へに行くわ」

「お婆チャン御病氣なのに、どうして出て来られるのか知ら」

「御病氣なんて嘘よ、もう治つたのよ」

「それならいゝけれど」

と、お母さまは心配顔をしていられました。

その夜お父さまがお歸りになつて此の事をお

三月の初めの事です。

あと一ト月すると學校に上るんですよ、とお母様に教へていたゞくと、ヒロミは嬉しくてな

りません。

それにもう一つ嬉しい事があるのです。

それはヒロミが學校へ上る頃に、お母さまに赤チャンが出来ると言ふのです。

「お母さん、赤チャンは男の子なの、女の子なの、ヒロミは男の赤チャンがいゝわ」

と言ひますと、

話しますと、お父様はしばらく考へていられたが、

「實はね、近く南方へ出かける事になつていたんだ。それで出發が何時になるかもわからぬから、由舎の御兩親に御挨拶にゆく暇もないから、一寸お手紙でお知らせしたんだ。それで出て来て下さるのかも知れない。それにしても大變な事だ。今どきの汽車はこむからね、途中で御病氣が出れば良いが、汽車ばかりでも十時間はあるし、七十に近い御齡だからね」

「本當に、もし途中で神經痛が悪くなつたらどうしませう。こちらから御挨拶にゆく間がないのですか」

「それがね、今日になつて、明後日出發と決定したので、今から行けばぎり／＼時間はあるが、今夜立つと言ふんだから今から電報を打つても間に合ふまい。もうお立ちになつていられるかも知れない」

「兎に角、明日は東京驛へお迎へに行つて下さい。ヒロミは大よろこびでお迎へに行くと言つています」

翌日は朝くらいから、ヒロミはお父さまに連れられて、郊外電車で池袋に出て、省線電

車に乗りかえて東京驛に行きました。

次々と来る汽車を待つて目を皿の様にしてお婆ちゃんを探しましたがみつかりません。

「お婆ちゃん御病氣になつたんじゃないか知ら……」

「そうかも知れんな」

心配しながらお家に歸つて来ますと、御叔父に鼠色のはなをの見たれぬ下駄がぬいであります。

「おや」とヒロミは思ひ胸がドキンとしました。やつぱりお婆ちゃんでした。

「でもまあ御元氣で何よりでした。神經痛の方はいかゞですか」

御挨拶がすむとお父様がおきこしました。

「それでね、お爺様に叱られたのだよ。ずつと痛くてね、特に夜、ねてから痛むのだよ、そんな身體で夜汽車に乗つて東京まで行けるもんか、と言はれたんだが、お前からの手紙を見て今度會つておかぬと、もう會へぬと思つたのだよ。するとね、神經痛がピタリと治つたんだよ。御爺様は仲々御許し下さらなかつたが、喧嘩をして出て来ましたよ」

と仰言ひました。

お婆ちゃんは荷物から色々とお土産を出さ

れました。お餅も出ました。小豆も出ました。お壽司も出ました。

「こんなに重い荷物を持つて来られたのですか、よくまあ御一人で来て下さいましたね」とお母さんは涙聲で仰言ひました。

「此の子は子供の時からお餅が何よりの好物でしてね、それに遠足だ、修學旅行だと言ふと、きつと私はお壽司を作つてやつたものですよ、此れは明日飛行機の上で食べてもらひませう。それから小豆はね、今夜お赤飯にしてお祝をしようと思つて……」

とお婆ちゃんのお話です。

お父さまはお風呂に水をくみこんで焚口にしやがみこみました。お風呂が沸いた時に「温泉の元」と云ふ白い薬を入れてお婆ちゃんにはいつていたゞきました。

夕御飯が出来た時に、みんなはお佛壇の前に集つておまいりをいたしました。お婆ちゃんの御經は上手でした。

赤い御飯をいたゞきながら御婆ちゃんは赤い御飯をいたゞきながら御婆ちゃんはお父様に仰言ひました。

「お前に會ふのもこれが最後かと思ふ、お前が無事に歸つて来ても、私はもうお浄土へ行つて

いるかも知れない。あとの事は心配しなさん
な、佛様におまかせして一心に御仕事にはげみ
なさい。悪い奴等をこらしめて御浄土の様な良

い世の中にする爲に戦争がおこつたんだから、
その戦争のお手傳ひにゆく事はきつと佛様もお
守り下さる。

んな目出度い事はない。わかり切つた事だけれ
ど、私はお前の顔をみて、この事だけを言ひた
かつたんだよ」

老野をさへい

壇 歌



投稿 官製ハガキにて編
規定 輯部歌壇係宛へ

北海道 花田 順 往

世を祈る年の始めの御社に寒さしのぎで梅ぞ咲ける
評 しづかな中に強く固い民の心を社頭の寒梅に比へて詠んだ歌で
もある。世を祈ると云ふ一句に大戦下の覺悟をも決意をも希望を
も含めて、あとは社頭の風物に艱難を凌ぐ意味を暗示してゐる
老手凡ならず

静岡市 杉浦 敏 夫

君がため散るいさぎよき兵ありて神代ながらの新年明けにけり
評 今年の新年は、有史以來の一大戦争下の新年である。外には何
百萬の皇軍が激しい戦いに身を命を鴻毛の輕きに比して惜しまぬ
内なる民は敵軍の決意の下に雄々しく闘んでゐる。併し新年
は新年である動中の静の如く大きな御世、不滅の世紀をきざ
む新年は訪づれた。若き作者の感慨も深いことであらう

岐阜縣 永田 祥 治

空襲を今し眞上に邀へ撃つ兵なる我の血潮たざりぬ
秋田市 大場 豊

尊くも君は左手にて筆をとり過ぎしくさを記しつるかな
三重縣 青木 桂 山

大君の邊に散りませる若櫻いさは高し不二の山より
岩手縣 中村 て つ

世の人の耳目うばひて神風隊敵をしづめぬ比島の沖に
京都府 竹内 修 吾

熔鐵爐赤しそれより猶赤あかし闘む學徒の類も心も
京都市 福島孝治郎

興廢の岐路に立つてふ此の秋にひたすら鍛ふ學徒勇まし
滋賀縣 鷗 飼 愛

ゆるみゆく心の綱を引締めてけはしきみちを我は歩まん
秋田市 妹尾馬之助

敵納のてつづきふめり日本刀心のこして去にし子のため

どんな事がおこつて
も信心さへしていれば
それはきつと良い事な
んだよ。その時は悪い
事の様に思つてもあと
で思へばきつと良い事
なんだよ。みんなお慈
悲なんだ。私達が良い
事か悪い事か知らない
だけなんだよ。

お爺様もいつも言つ
ていられる。戦争が長
くなるの短くなるのと
言ふ人もあるが、長く
たつて短くたつて、天
子様が戦争をやれと仰
言つて下さつたんだか
ら、私達は只一心に戦
争をすればいいんだつ
て、その戦争の御手傳
ひに行くんだから、こ
んな目出度い事はない。わかり切つた事だけれ
ど、私はお前の顔をみて、この事だけを言ひた
かつたんだよ」
お父様は
「はい、」
と言つて子供の様にきいていられました。
みんな寝てからヒロミがフト目をさますと、
お婆ちゃんのねている方から
「ウーン、ウーン」
とらなる様な聲がきこえます。何だらう、お婆
ちゃんが御病氣になつたのか知らと、考へてい
ますと、お父様も目をさましたとみえて
「お婆さん、お婆さん、身體が痛むのではあり
ませんか」
と聲をかけました。
するとお婆ちゃんは
「うむ、なに、私が何か言ひましたか、お前は
明日の朝は早いんだから、早くねなさい」
と言つて、あとは静かになりました。
やつぱり御病氣じゃなかつたんだな、と安心
して、間もなくヒロミはぐつすり眠つてしま
いました。

信 仰
相 談

戒 律 と 念 佛

(問)

日々念佛に一切を捧げて居る者ですが、或る書物を見たところ戒律のない佛教は本當の佛教ではないと書いてあつたので迷つて居ります。戒律の内容を見ますと何うも守れないことばかりです。畢竟戒律は昔のことでは形體だけなのでせうか。或はある程度まで守ればよいのでせうか。そして佛教には戒律が必要なのでせうか。(鹿児島市・小山生)

(答)

戒は道德のことであり、律は教團の法律のことです。然しあなたの仰しやつた「戒律」は多分箇條書きになつて居る「律」のことではなからうかとも想像いたします。昔は一般に律のことを一口に戒律と云つて居りましたから、一般の方がその區分を御存知ないのも無理はあり

の傳統を紹いだ大乘戒の祖師の一人であります。如何にすれば凡夫の身として戒を完うし得らるかに就いて御苦心遊ばされた結果、念佛を以て日常生活を統一すれば例へそれが犯し勝であつても「念々稱名常懺悔」で始終清められて行くから、やがて天野四郎の盜賊がなほつたやうに、おのづから戒がたもたれて行くことを確認されたのであります。されば淨土宗で行ひます授戒には必ず「お日課」と稱する「念佛戒」の誓ひが附いて居るのであります。

聖道門流の正面を切つて居る姿から見れば「戒」は是非必要であります。が、内實にはおかしさに過ぎません。兼好法師の「つれく草」にも「せぬは佛、かくすは上人」と言つて居ります。之れは佛以外の者は皆な戒を守ることが困難であることを諷したものであります。戒は道德ですから守らねばならぬことは無論であります。が、箇條書きのものには尙ほ色々考慮せねばならぬことがあります。例へば殺生と言ふことから肉食を禁じて居る問題の如きは、「生命をたつ」ことの意味を徹底的に論ずれば、米でも野菜でも皆な生きて居るのでありますし、また自分自らの時間を空費することなども自分の生命を殺して居る事になつて問題に段々むつかしくなります。結局現在の殺生戒と云ふものは中途半端のところ止まつて居るやうになつて居ります。殊に印度のやうな熱い國では生理上には肉類は要求されず、それは唯だ贅澤から來て居るものに過ぎませんから無論禁じてよろしいことですが、寒帯地方になりますとさう簡單には考へられなくなります。生理上自然に鳥肉等の肉類が要求されるからであります。また衣類にしたところでは熱帯では薄い布が三枚あれば事が足ります。謂ゆる三衣と稱



柚の醗酸味

齋藤 弔花

「浄土」のAさんが、私の宿に來て下さった。その節パンの包みに白砂糖を添えて持つて來て下さったのを一緒にいたゞいた。それから、洋服のかくしからころ／＼と黄色いもの三顆「歸つてからお喫んなさい」と云つて行かれた。

それはなつかしい柚だった。柚は黄色く熟れて居る。青い葉かげ、尖々しいぎつちような枝、そこに手鞠のやうに生つてゐるのがこの果物の性格で、林檎のやうでもなく、柿のやうでもなく、柚は實に俳味たつぷりの超世間的な存在である。よくお寺の生垣の外に、大きなしげりを見せて、秋から冬の長い生命を有つてゐる。柚は、枝に刺があり、攀ぢられ

ないので、よく長い竿でかち落した。皮の内なる袋が弱くて、上の皮が破れると袋がつぶれて、丸い大きな種が眼をむいてゐるのがおかしかった。

霜が下りると、皮の澁みがとれて、分厚の皮そのものが食べられる。子供の時これを食べる時、いつも金柑を思ひ出した。袋の中の液は酸っぱいが、皮は苦い中にも味があり、齒に軽い刺戟を與へて、いかにも親しみにくい、又捨がたいものである。

「私の家の東の松の生垣の中に一本大きな柚の木があつたが、初冬の朝、霜を被つて、生々した黄色の葉が葉くれる黄金の鞠を綴つた。そのころ、低い生垣の外の出圃

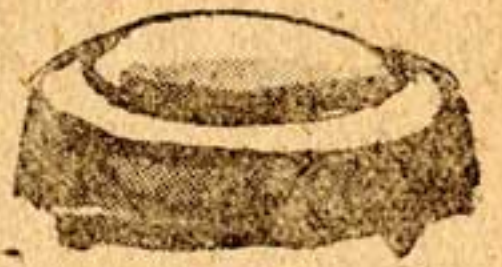
には、稲が刈られて、稲木にかり、小さい水溜りに、椋鳥が群れて來て羽を洗つたりしてゐた。子供の時分、よくそれをかち落した。杉垣深く落ちたのは拾ひ難かつた。下はみつひきぐさの生えて小川でそこへ流れて行くのもあつた。

大凡その頃から、村は底寒く、時雨で、そのはれ間の明るい秋日はハゼの葉に輝いてゐた。「丹波は雪が降る」といふ寒い豫告が、私の山裾の村の雲が柿の朽葉傳はつて來る。コスモスが爛々とゆれて、日向戀しいころ縁側に立つて、私はよく柚の木を見上げてゐた。

そんな記憶が、今、老いた私の心に甦つた。柚はおもしろい果物だ。旅の宿に、Aさんからいたゞいた柚の皮をかみながらこの文を認む。

するものであります。然るに寒帯になると獸皮位は着なければ堪へられないのであります。このやうに日常生活と殺生の問題とは深い關係をもつて居りますから單に道德上からのみで考へるのも少し當らない點があるかと思ひます。

こんなわけで具體的な箇條書を守ることは地域に依つて困るものが出來て來ます。それ故「律」よりも「戒」の精神を生かすことに主力が注がれるのがよいのであります。こんな關係から法然上人は念佛を以て生活のまとめ、念佛の中に戒をふくめることを御主張遊ばされたのであります。あなたが今念佛に一切を捧げて居られるならばもうそれでよろしいではないでせうか。此上に一々の箇條の律を氣にして却つて念佛をおろそかにしては何にもならないことになりはしないでせうか。



淨土宗鍊成思想

大野 法道

昭和十二年七月七日に支那事變が勃發してから、戦火は次第に擴大し、同十六年十二月八日大詔を拜して大東亞戦争となり、爾來滿三ヶ年になつて、今日比島方面に於て正に決戦の眞最中である。皇國の民草一億は、こゝに東亞十億の人々とともに、必勝の信念を固めつゝ緊張の頂點にあり、力闘奮迅、全身の力をつくして戦力の増強に直進しつゝあるのである。

鍊成といふことがやかましくなつてきたのは、今から顧れば七年前の支那事變が始まつてからで、各團體は鍊成行事を行ふこととなり、各地に鍊成道場が設けられ、そこへ一定の期間入所して、嚴格な鍊成條規を守つて生活の鍛鍊をするやうになつた。之は戦時下の生活としてまことに必要不可欠のことである。戦争前の自由時代のやうに、お金さへ出せば何でも欲しい物が手に入る時には、物の有難さが判らず、物を粗末にすることが多かつたが、いざ戦争となつて、あらゆる物資が乏しくなると、自然に今ある物を大切にせねばならず、少しの物でもおろそかにはでき

ぬやうになつた。

鍊成の目的は、かうした物を大切にすることを徹底させるところにある。廣く言へば、僅の時間も無駄のないやうにし、わが身の業に弛みや怠けのないやうに修練して、張り切つた日常生活の續くことを期待するのである。

所が近頃、翼壯の役員のある人から聞いた話であるが、今、鍊成問題で切に要求せられてゐるのは、道場へ入つてゐる時の一舉手一投足を苟くもせぬ生活を、そのまゝ日常生活に移す方法だといふ事である。

成る程、入所の間いかに張りきつてゐても、わが家へ歸つてやれ／＼といふ氣持になつたのでは、何のために鍊成したのやら判らなくなるから、どうしても鍊成は、業の本となる心の修練が根本である。手足を動かすことがいくらか整つても、肝心の心がそれになつてゐなかつたら、歸つてくると冷めてしまふ。

二

からうした鍊成の問題について、心といふものに業を練る道が、法然上人の淨土宗に於て、どのやうに説かれるか、また上

人の流れを汲まれた歴代の列祖や先徳が、いかばかり鍊成の實績を挙げられたかについて、當分の間、引きつゞいて本誌に連載させて貰ふことにする。

淨土宗の鍊成に關する思想は、本尊たる阿彌陀佛が、實に衆生の歸趣すべき眞實の世界のために、鍛鍊にたんれんが重ねられ、どこまでもたんれんに終始せられる佛である所に基礎がある。

無量壽經に説かれるやうに、阿彌陀佛は衆生の來り生れる淨土が、いかなる姿であるべきかについて、二百一十億の世界を資料として、その中から選擇されたのである。そして四十八願にまとめて、わが淨土は斯くあるべしと決定なされたのであるが、その間の、衆生の生れるべき眞實の世界を發見なされる辛苦は並大抵のことではなく、經に、五劫を具足して、佛國を莊嚴する清淨の行を思惟し攝取す。

とあるやうに、長い／＼時間に亘つて練りに練られたのである。

衆生と淨土を結ぶ直線たる念佛は、四十八願の第十八願に打立てられたが、この念佛が實動力を具へて、淨土への道となるには、四十八願全部の成就が必要であるから、それがために佛はまた、長い間の菩薩行の鍊成に精進なされたのである。經に、
兆載永劫に菩薩の無量の徳行を積植す。

とあるやうに、長時の鍊成によつて菩薩行を爲し遂げられこゝに始めて念佛が不思議の力をもつて、淨土への第一道となつたのである。

法然上人は夙に、佛のこの容易ならざる辛苦の程を洞察されて、念佛はなみ／＼ならぬ佛の「選擇」から出たものであると説かれた。つまり練りに練つて選り取られた尊さを感得されたのである。

念佛なるものが佛の鍊成から出たのであるから、衆生が之を申し唱へるのも、また鍊成で行くべきは當然である。法然上人の説かれる念佛は、之を極めて素直に示してゐる。上人は、

信をば一念に生ると信じ、行をば一形に勵むべし、(勅修傳卷二十一)。

と教へられたやうに、「一念」即ち一聲の念佛にてよく淨土に生れるといふ信念は、おのづから念佛を相續し、命のあらんかぎり「一形」即ち生涯を通じて唱へることになるのである。つまり念佛は絶えず鍊成せらるべきであつて、常に磨かれねばならぬ。

昔、法然上人の頃に、一念義を主張して多く念佛せずともよいといふ人があり、また多念義を主張して多く申さねば駄目だといふ人があつた。がそれらは一と多にこだはつた偏見である。一念に充足を感ずればこそ、念佛相續せずには居られぬところに、佛教の中道の精神が躍動してゐる。

編輯後記

◆發刊が大變遅れ申しわけありません。印刷能力の低下、輸送上のこと等が重なつてこのやうなことになるに恐縮してゐます。いろいろなお問合せやお叱りを受けましたので、ここにお詫びいたします。

◆今後は失態なきやう努力いたしますので御寛容願ひます。

◆そこで従來の色刷りをやめ、表紙を活版にし、頁數を變へ、以て

發刊の遅延を防ぐことにしました

◆葉書節約のため、帯封に前金切

れの印をおし、別に通知いたしま

せんので、右御承知下され會費を

お納め下さい。

◆新會員に御加入には一年分會費

に「新會員」と御明記下さい。

◆吉田絃二郎先生は宿病の御手術

をされ、舊に倍しての御元氣です

身體に活氣がでて空襲下の御活躍

が自由になつたと申されてゐます

◆好評だつた中村康先生の法語

解説の後をうけて大野法道先生が

浄土宗の練成に關し御連載下さる

ことになりました。これは主とし

て古來より行はれてゐる宗教的練

成について御教示ある筈にて何卒

御愛讀願ひます。

俳壇

太田耳動子選



投稿 官製ハガキにて編
規定 輯部俳壇係宛へ

稲車月の面にこたませり
掃きよせて銀杏落葉のさも黄なり
蟹賣の蟹をおそろゝ小菊かな
竹藪の月すさまじく鴨が飛ぶ
冬の月白し戰果の果しらず
試歩の道とさして落葉うづたかし
稲拔の聞ゆる丘に布團干す
大根の白きが映ゆる爐端かな
元日の一天はるか晴れわたり
石路の花清らに時雨來りけり
旋盤の響にのりて轡虫
螢とびて黄昏きたり椰子の濱
稲拔に又降る雨をうらなへり
生れ出でし子をはかりけり暮の秋
僧老ひて日向ぼこりの書見かな
返り咲く蘭を活けし炭焼女
古妻の夜毎わすれぬ輝藥
女湯に兒の泣きやまず秋暑く

岐阜 永田祥治
京都 澤井弘陽
館山 小宮蒲柳
愛知 中村一幸
東京 島田一郎
北海道 高島喜八郎
京都 藤田義之助
新潟 拜郷賢三
静岡 杉浦敏夫
滋賀 鶴飼愛
京都 福島孝治郎
比島 福島統
鳥取 米田一聲
竹田 竹田無草
高知 竹原敦圓
同 平野雪女
同 上田みのる
岩國 長岡白朝居

浄土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年一月三日印刷納本
昭和十年二月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順

發行人 眞野 正順

東京都芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 村瀬 秀雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

會員番號二二五一七八

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢

(送料二錢)

會費 金一圓六十八錢

一ヶ年 (送料共)

振替振込はすべて十錢増のこと

定價金十二錢 (送料二錢)

浄土

第十一卷 第二號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和二十年一月廿日印刷納本 昭和二十年二月一日發行